

UNICORN INTERVIEW
special edition- 2

UNICORN 3

LESSON 7 We Are Not Alone: An Invitation to Social Psychology

×

東京大学 (社会心理学)

唐沢かおり先生

今回は、UNICORN English Communication 3 の LESSON 7 We Are Not Alone: An Invitation to Social Psychology の課でお世話になった、社会心理学研究の第一人者、東京大学の唐沢先生にお会いしてきました。ご専門の社会心理学のお話からご自身の高校生時代のお話までいろいろとお聞かせいただきました。



1992年 University of California, Los Angeles Ph.D
1992年 京都大学大学院文学研究科博士後期課程
1992年 名古屋明德短期大学講師
1995年 日本福祉大学情報社会科学部助教授
1999年 名古屋大学情報文化学部助教授
2001年 名古屋大学大学院環境学研究科助教授
2006年 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年～ 東京大学大学院人文社会系研究科教授

■ 質問タイム開始！

質問 1 ■ 高校時代に一番好きな科目は何でしたか。

唐沢先生：社会が好きでした。とくに日本史かな。歴史は人間がドラマを持って動く、というのがだいご味ですね。だから歴史ドラマが大好きでした(笑)。京都出身ですので、そういったドラマに出てくる人物や場所が身近だったから、という理由もあるかもしれません。

大学を決めたのはいつですか。

唐沢先生：中学の頃から京都大学に行きたいなあ、とばく然とっていました。地元の大学です。高校時代には文学部に決めていました。その頃は、数学が苦手な勉強するのがいやだったのですが、京大入試の2次に数学があった頃なので、浪人中に「大学への数学」をみっちりやったところ、数学のおもしろさが分かりはじめました。今から思うと、高校時代にもっと数学をやっておけばよかったなあ…と(笑)。世界の見方にはことばを通しての見方と、数学を通しての見方があると思います。私たちの多くはことばを通して世界を見ていますが、数式で見ることができる人もいます。数学者とか物理学者とか。世界のあり方をことばで説明することもできますが、数式でほん、と表すこともできる。

学部はどうやって決めましたか。

唐沢先生：高校時代から好きだったことは、ほとんど文学部にあったので。歴史学とか哲学とか。あと、フロイトやユング、河合隼雄先生の本も読んでいて、「人の心」の中にある「隠された何か」って神秘的なんだと思い、心理学にも興味を持ちました。実際の心理学は実証科学なのですけどね。

高校時代に気になった本/作家は？

唐沢先生：その頃は日本の作家で教科書に出てくるような人たち、芥川龍之介、夏目漱石などよく読みました…そう、三島由紀夫！その頃の年代には書かれている内容が背伸びをしている、というか…高校生という反逆時代にマッチした内容ですね(笑)。

高校時代に夢中になったものは？

唐沢先生：美術部でしたので、油絵に夢中でした。今でも描きたいと思うことはあります。

高校時代に面倒でもやらなければならないことは何でしょうか？

唐沢先生：ちゃんとした言葉に接することでしょうか。とくに、きちんと読んだり書いたりすること。大人になったらこの力を持っていることは「財産」です。自分自身について考えるとき、人とおつきあいするとき、必ず必要になるものですから。私は今でも自分の書く

文章がへただなあ、と思う時があります。東大の先生方はみなさん、文章を書くのがお上手なんですよ！（笑）

質問 2 ■ UNICORN 3 では高校生の読者に心理学についてご説明いただいた文章をご執筆いただきました。ここで簡単にもう一度心理学について教えてください。

唐沢先生：心理学とは、私たちの日常の行動を説明する学問です。脳の反応、ものを知覚したり考えたりすることから、社会の中での行動まで、幅広く扱いますが、日常経験と関連させて言うなら、身の回りにいる人に対して、「なぜこんなことをするのだろう」と思ったことはないですか？そういうとき、それを心の働きという視点から説明することを行っています。さまざまな行動の背後にある、私たちの心のメカニズムを明らかにしようというのが心理学です。

LESSON 7 には同調実験の様子が描かれていましたが、唐沢先生が大学生のときに行った実験を教えてください。

唐沢先生：卒論の実験では、他者に関する記憶、特にその人の行動に関する記憶と印象との関係を研究しました。一般に他者に対する印象は、いったん持ってしまうと変わりにくいといわれていますが、その他者が印象と反する行動をしたときは、そのことを良く覚えていて、印象も変わると思いますよね。ところが、実際にはそうではなく、自分が思っていた印象と異なる他者の行動に接したとき、私たちは、「この人はこんなことをするような性格じゃないのに」、「何か特別な理由があったからそうした」と思ってしまいます。そう思うことによって、その行動を「印象を作ることには関係のない情報」としてしまい、結果的に、その人に関する記憶の中に残らなくなってしまいます。だから、人は最初に作り上げた相手への印象から、なかなか逃れにくいのです。

実際の研究では 60 人くらい、友達の友達まで集めて（笑）、実験に参加してもらいました。その人たちひとりひとりに、スライドに架空の人物について書いた説明を読んでもらい、その人の印象を形成してもらって、その後、さまざまな行動をスライドで提示し、「その人が行った」と考えて読んでもらいます。その後しばらく時間を置いて、行動の記憶を調べたり印象評定をしてもらったりするというものです。

今携わっておられる分野以外で研究したいのはどんな分野ですか。

唐沢先生：今、高校生だったら、バイオ関係とか、遺伝学などに興味を持つかもしれません。もともと理科の中では、生物が一番好きでしたから。ただ、他の先生がたのお話をお伺いすると、どんな分野も面白そうと思います。





先生の研究室では、学問領域の相互乗り入れのようなことは行われていますか。

唐沢先生：今、一緒に研究しているのは、哲学者の人たちです。私の研究室では道徳的な判断の研究をしていますが、それにかかわる議論は、哲学でも盛んですし、学生同士は、読書会をしたり、私のゼミに哲学が専門の学生さんが来たりもしています。

先生が発案されたユニークな授業について教えてください。

唐沢先生：「言葉と人間」というタイトルで、文学部のさまざまな分野の先生方において実現させた楽しい授業でした。授業時間の前半に、おひとりの先生に講義してもらいますが、その場には分野が異なる他の先生も出席しています。後半はディスカッションなのですが、出席している先生方からの質問が飛んで、先生同士が議論するという場を作ります。この授業は、どこの学部の子も参加可能で、最初は学生も遠巻きに聞いているだけでしたが（笑）、慣れてくると彼らも議論に参加してきて盛り上がりました。哲学、美学、社会学、言語学、とそれぞれの分野の第一人者をお呼びしたのは、自分が聞いてみたい、というのがいちばん大きな理由でしたけれど（笑）。もちろん、高橋先生にも参加していただきました。



質問 3 ■ 先生は学部の学生だったときにアメリカの大学(UCLA)に留学されています。

アメリカの大学を選ばれた理由は？

唐沢先生：アメリカは心理学の研究がもともと盛んな国のひとつで、とくに UCLA は社会心理学の研究ではすぐれていました。社会心理学者 Bernard Weiner 教授がいらっしゃるということも魅力でした。卒論で研究したことを発展させて、人の行動を、その人のもつ性格のせいと考えるのか、それともおかれた状況のせいと考えるのか、そのことが後の対人態度や行動に与える影響を研究しました。

留学時は英語でのご苦労はありましたか。エピソードを教えてください。

唐沢先生：大学の授業では、読むことや準備したうえでのプレゼンはなんとかできました。日本で学んできた専門知識があったからです。英語は読める力は必ずつけてください。読めないと何も始まりません。しゃべる力もなくてはだめですが、マックで注文できる力、は大学の勉強では必要ありません（笑）。インテリジェントな考えを相手に伝えるときは、やはりきちんとした文章をいかにつくるか—この場合は英語の文章ですが—を学んだ方がいいと思います。それにしても、今思い出すと、私の留学先は西海岸だったので、自分のような東洋人がふつうに暮らしている地域でもあったので外国人として扱ってもらえず、「道を聞かれる」「レストランで注文を聞かれる」などは、手加減してくれませんでした(笑)。大好きな TV 番組の「オチ」が分からなかったり、映画を見てもよく分からなかったり、などはしょっちゅうありましたね。でも、必ず慣れます！

高校生や大学生に「海外留学」を勧めるとしたらどういう点がよいですか。

唐沢先生：留学は、自分の知らない世界に入り込む機会です。自分のことを分かってもらえない、そんな状況下で得た友人は宝物です。学生時代は、新しいことが覚えられる時期、打たれても平気な時期—つまりしんどいことをしても立ち直れる力があるときなので、海外留学はぜひ学生時代におすすめします。

質問 4 ■ 高校生や大学生に勧めるものとして、ほかにどんなことがありますか。

唐沢先生：学生さんたちには、大人から見ると時間がたくさんあります。効率を考えずに何かをやってみる、興味や関心のあるものばかりでなく、あえて知らない世界をのぞいてみる、そのようなことをしてみてください。

母校の京大のお勧めの点は？

唐沢先生：京都大学の魅力は放つといってくれるところでしょう（笑）。おもしろいと思ったりやる、授業に行かなくてもいい（よくないですけど）、空気が自由で放牧状態（笑）。既存のものを学ぶ、というよりも、自分で新しい何かをつくる、というスピリットが養えると思います。



質問 5 ■ 先生のゼミの生徒さんたちには研究者以外にどのような進路がありますか。

唐沢先生：論理的・批判的に物事を考える、という学問なので、そういったことが活用できるという点では、コンサルティング会社や広告代理店、公務員など多岐にわたっています。

先生から高校生に向けて、心理学のお勧めを…



物理学が「物」の「理（ことわり）」を考えるのと同じように、心理学は「心」の「理（ことわり）」を考える学問です。でも、心は、自分にとってもっとも身近なものであるにもかかわらず、大変不思議な存在です。それ自体がいったい、どのようになっているのか、どこにあるのかすら、はっきりと言えないですね。しかし、この不思議な存在がどのような法則で動いているのか、いかに私たちの行動をつかさどっているのかを明らかにしていくことは、「心を持つ存在としての人間」が、なにものなのかを問うことにつながります。その意味において、心理学を学ぶことは、自分や他者を見つめなおし、理解するための新たな手がかりを得ることにもなるのです。

ありがとうございました！